

## 第7分科会

### 要約学習～情報収集からプレゼンへ～

発表者 元飯南町立赤来中学校校長 烏田 勝信



文章を読み、要約し、それを再現して人に伝える、この要約力をつけるために、人の話や文章をメモ（要約）する学習を実践してきており、これを要約学習と呼んでいる。メモの取り方としては、文字だけでなく絵、図、表やキーワード等を使って図式化し、次にそれをプレゼンする（再現して人に伝える）学習を展開してきた。プレゼンするには自分の感想や意見を述べることも必要であり、そのため、感想や意見を書くだけでなく、ディスカッション等も取り入れるようにしている。このように文章や人の話を要約する力、そしてそれを

を再現する力、それに感想や意見を付け加える力が合わさって文章を読むことになると考えている。

分科会の前半では、参加者が要約学習を体験する時間が設定され、参加者は真剣に要約学習に取り組んだ。また、質疑応答では、司書教諭や教諭の方から要約学習の具体的な展開の仕方等についての質問が出された。

## 第8分科会

### 情報発信するための新聞へのまとめ方

発表者 大田市立第一中学校教頭 山尾一郎



現在、島根県N I E推進協議会のアドバイザーを務める山尾先生の社会科教員としての経験や、山陰中央新報社での長期社会体験研修等を踏まえた、次の4つに焦点をあてた分科会であった。○なぜ新聞にまとめて発信するのか  
○新聞の特性 ○新聞の読み方 ○新聞の作り方

主な内容は次のとおり。(1) 新聞は見出しがあることで読みやすく、見出しを見るだけで新聞の伝えたいことが分かり、見出しを比べることから各紙の価値判断を見取ることができる。(2) 新聞には一覧性、詳報性、記録性・保存性、確認性、速報性がある。(3) 同じ資料に基づいていても取材記者の主観等によって記事が変わってくることもある。(4) 取材に基づき記事を書き、レイアウトを工夫して読みやすくし、見出しで記事の最も重要な内容、要素をズバリ言い切ることが大切である。

フォーラム当日に各社が発行した新聞や過去に発行された新聞の記事を資料として使いながらの講義・演習であったので内容がわかりやすく、児童生徒が新聞を作成して情報発信する際の留意点や、参加者自身が新聞等が発行する際の留意点について具体的に知ることができた。

## 第9分科会

### 子どもの心に魔法をかける～ストーリーテリングの世界～

おはなしブリュッケン代表 宇田 祥子



はじめに、日本や外国の昔話、創作童話などを、読むのではなく覚えて語る「ストーリーテリング」(お話)が、ここ数年、県内でも盛んになっている様子について話をされた。学校や公共図書館などで「お話の会」を定期的に行うところが増えているのは、「お話」のおもしろさや豊かさ、子どもに働きかける力の強さ、深い喜びなどが、多くの人の心をとらえはじめたからだという。

次に、実際にストーリーテリングをされた。「白鳥」(H・C・アンデルセン作 松岡享子訳【福音館書店】)であった。40分程度であったが、苦難を乗り越え、ついにお兄さんたちを救う主人公エリザの愛と勇気と忍耐の物語に、参加者は静かに聞き入った。

そして、「お話」の豊かさ、「お話」のもたらすものについて話された。特に、「お話」の、ことばに集中し、積極的にことばにかかわっていくことの良さや自分の力でイメージを創り出す楽しさを体験できる良さ、昔話にこめられたメッセージ性などにより、「お話」が「読書の素地を養い読書へと導く」ことや「生きる力を育てる」ことを強調され、実際に「お話」する際に適した本も紹介された。

最後に、今日の「白鳥」を聞かれたイメージと感覚を大切にしてほしいこととともに、「よいお話を聞いた安心感と満足感は、子どもの心に希望の種をまく。お話を聞きながら蓄えた力は目に見えないが、内在する力は大きい。大変な時代に生きる今の子どもたちにこそ、たくさんの物語が必要だ。そして、ひとりでも多くの子どもたちに『お話の楽しみ』を味わってほしいと願っている。」と話され分科会を閉じられた。

## 第10分科会

### 心ときめく本との出会いを ～ブックトーク「妖怪・妖精と出会う」～

松江市立宍道小学校 発表者 司書教諭 林 良子



ブックトークは子ども達に読書意欲を喚起する読書指導である。「子どもたちに魅力的な本との出会いをさせたい!」という思いから、宍道小学校では、各学年の年間計画に読書指導としてブックトークを位置づけ、授業として司書教諭が全クラスで行っている。

本分科会では、40名の参加者が6年生の気持ちになって、林先生のブックトークを聞いた。

『日本妖怪大全(水木しげる)』の紹介から始まり、『床下の小人たち』(メアリー・ノートン 作)まで、「妖怪・妖精」のテーマに沿った9冊の本を順序立てた流れの中で聞くことができた。子どもたちに本格的なファンタジーを読んでほしいという願いをもって組み立てられた今回のブックトークだが、参加者は、林先生の巧みな語りと温かい雰囲気の中で、本の世界に引き込まれていった。

最後は、林先生の、「ブックトークは選書が命。『ニルスのふしぎな旅』や『ホビットの冒険』などは長くて骨の折れる本だが、読み終えた時、子どもたちの心が満足感で満たされるような本を紹介していきたい。」という熱い言葉で本分科会を閉じた。

## 第11分科会

### 読み聞かせで育つもの

発表者 島根県立図書館読書普及指導員 江角宏子



読み聞かせは、子どもと共に楽しむことができる優れたコミュニケーションの場であり、その中で培われるものについて、読み聞かせのポイントを交えながら分かりやすいお話があった。

読み聞かせにより子どもたちの心が育つ。子どもたちは、大人に話しかけられると、「愛されている」、「自分の存在を認められている」という感情が養われ、その経験が人を信頼する心につながる。赤ちゃんは生まれる6か月前の胎児の頃から聴力が発達してくると言われることから、まだ赤ちゃん

がお母さんのお腹の中にいるうちから読み聞かせを始めることをおすすめしている。

また小さい頃から絵本とふれあっているうちに、自然と文字を読めるようになって言葉が豊かになり文章力が身についてくるなど、読み聞かせは子ども達の成長にさまざまな良い影響を与えてくれる。

成長するにつれ耳から文章を聴く機会が減ってしまうので、子どもが自分で読めるようになるまで読み聞かせを続けることが大切だと話しをされた。

数冊の絵本を紹介しながら実際に読み聞かせをしてくださったが、優しい声とゆったりとした心地よい空間に、参加者全員が引きつけられるように見入っていた。